

「明治の人」として森鷗外と樋口一葉は外せない。

夏子（一葉）は明治二十三年、十五歳の時、書道（手陰流）と歌道（源氏物語）を究めようと、中島歌子の歌塾「萩の舎」の通いの弟子となった。

上流階級の子女らが、大皿に書いてある「赤壁の賊」を唱和しているところへ、入塾間もない夏子が分け入って後を続けた。小生意気な新参者と思われたに違いない。

夏子の日記はこの記述から、始まって、亡くなる前日（明治二十九年十一月二十三日）で終わる。

「清少納言に紫式部の才なしといふべからず。式部が徳は少納言にまさりたるも、さりとして、少納言を貶めるは誤まりなり。式部は天の愛し子にて、少納言は霜ふる野辺におかれた身である」夏子は式部の徳が少納言に優っていると認めながら、少納言に自身の姿を投影している。

夏子にとって「萩の舎」で学ぶ書道と歌道は、生きていくための糧で、一日も早く独立してたくさんの弟子を取りたいと思っていた。

歌子の弟子の一人が許しを得て歌塾を開いた時の夏子は、嫉妬のあまり「あんなつまらない歌……あんなつまらない人が弟子をとるとは……」と荒々しい言葉を遺している。書の道を究めるために自身が格闘する日常を綴った日記ではあったが、出版社の要請でこれを推敲し、草書体に書き変え「闇夜」続いて「文学界」に断続掲載された「たけくらべ」が森鷗外・幸田露伴により絶賛された。

樋口一葉の名前は世間に知られることになったが、一年後に二十四歳の若さで死去したのは余りにも残念である。死に際し妹節子に

「自分は書の道を究めたかった……」と言い、日記が公表されることを躊躇った。姉の死後、節子は日記の中で「本の出版に至る部分を破棄した」という。

参列者十数名と言う葬儀の席に、騎乗の正装で付き従う事の不釣り合いに想い至らない鷗外が、一葉の

「作家であるよりも自分は書家でありたかった。日記の公表は望まない」という想いを知っていただろうか。